

FLEABASS® 

an introduction

日本語対訳書

©2010 Yamaha Music Trading Corporation

※この対訳書を無断で複製、頒布、引用（内容の一部、全部を問わず）する事は法律で禁止されています。

■ Getting Started 初めに

こんにちは。僕はフリー。今日はきみの初めてのベース・レッスンの講師を務める。楽しみだ。

まずはベースそのものから始めよう。これがフリー・ベース。立派なベースだ。ベースというものは、いくつかの部分によって構成されている。ボディは高品質の厚い板からできている。がっしりしていて、とてもいい感じだ。フリー・ベースの原料として使われているのは栽培された樹木だけで、持続可能な資源だ。これは僕にとって非常に重要なことだ。

次はベースのネック、この突き出している部分だ。ネックにはフィンガーボード（指板）があって、これはローズウッド製だ。このフィンガーボードに指を押さえつけるのは気持ちいい。そしてフィンガーボードに垂直にはめこまれた金属片は、フレットと呼ばれるものだ。フレットの間を押さえると、場所によって異なる高さの音になる。どこを押さえるかによって弦の長さが変わり、それによって音の高さが変わるからだ。例えばこのフレットを押さえれば弾くと、この音になる。これはBだ。[演奏] Bになるのは、弦がこの長さになっているからだ。指を上にならずと弦が短くなり、音が高くなる。つまりこのBから… [演奏] 上にならずと、1オクターブ上のBになる。[演奏] 音が高くなる。

このようにボディがあり、ネックがあり、フィンガーボードがあり、フレットがある。ネックの終わりのところにあるこの白いプラスチックの部分は、ナットと呼ばれている。ナットは、弦を所定の位置に保つためのものだ。ネック上の正しい位置に固定する。

ナットの先には、ヘッドと呼ばれる部分がある。ヘッドにはチューニング用のペグが4本あって、それぞれの弦に対応している。ペグをどちらかの方向に回すと、弦は高くなったり低くなったりする。通常のチューニングでは、弦の音程は、E、A、D、G、と4度の間隔に合わせる。これが伝統的なベース・ギターのチューニングだ。弦は4本あるが、一番低いのがEで、次がA、その次がDで、その次がGだ。E、A、D、G。[演奏] オッキー。

反対端にある黒い長方形のものは、ピックアップだ。ピックアップは、指で弦をたたいた時に出る音を電気信号に変換する。この電気信号がベースの電子装置を経由してベースアンプへ送られ、サウンドが生まれる。つまり、ベースの音を増幅するためにはピックアップが必要で、エレクトリック・ベースはア

ンプで増幅せずに大勢の人に聞かせることはできないから、このピックアップは不可欠だ。

弦は、ここにあるブリッジと呼ばれるパーツの中に入る。ブリッジは、ベースに弦を固定する錨の役割を果たす。ここに小さなネジがあって、これをレンチなどで回せば、ネック上の弦の高さが調節できる。弦高によって感触やサウンドが変わるから、人によって好みがある。自分に合った弦高は、経験とともにわかってくるだろう。しばらくベースを演奏していれば、自分の好みに合わせて調節できるようになる。フリー・ベースでは、気持ちよく演奏できるように調節している。僕は弦高が低めで演奏しやすいのが好みだ。わざわざやりにくくする必要はないと思う。楽に演奏できるのがいい。

弦はここからブリッジの中に入っている。裏に4つの穴がある。ベースに弦を張る時、この穴に弦を通して表から出して、上のチューニング用のペグのところまで引っ張る。オレンジ色の板は、ベースの裏にある穴のカバーだ。この穴の中にベースの電子装置があるけど、ふだんは開ける必要がない。

前面にあるオレンジ色の円形の板は、ピック・ガードだ。ピック・ガードはもともと、ピックを使って演奏する時にベースに傷がつかないように守るためのものだった。僕は個人的にはベースに傷がついても気にしない。年季が入ってちょっと傷んでいるほうが、味があっていいと思う。だからピック・ガードは、主に視覚的な効果のためにつけている。このフリー・ベースは、クールなルックスにしようと思ってデザインした。僕はこのデザインがとても気に入っている。

ここに2つのノブがある。1つはボリューム・ノブだ。ノブを回せば音が大きくなったり小さくなったりする。もう1つはトーン・ノブだ。これをいっぱいまで下げると低音域が強調されたサウンドになるし、いっぱいまで上げると一番高音域まででるようになる。これをいじって、好みのサウンドを探すといい。ベース・ラインを演奏する時、トーン・ノブをいっぱいまで下げると、低くて濁ったサウンドになる。これで例えばレゲエのベース・ラインを演奏する。[演奏] 低音が響く、レゲエっぽいサウンドだ。反対に、いっぱいまで上げて高音域を出すと、まったく別のサウンドになる。[演奏] 求めるサウンドに応じて調節しよう。僕は目指すサウンドによって、トーン・ノブをさまざまな設定にする。

ベースのこの部分にある穴は、コードを差し込むところだ。コードの先端に

ついているプラグをここに差し込んでベースを接続する。フリー・ベースは、ボディのこの部分に入力があるから、プラグのところが直角になっているコードを使うといい。まっすぐになっているものは、ちょっとじゃまになる。こんなふうにプラグが直角になっているものは、じゃまにならない。見た目にもすっきりしている。外れないし、壊れない。これで準備オーケーだ。

それから、ここにある小さなパーツは、反対側のこの小さなパーツとセットになったストラップ・ホルダーだ。これでストラップを取りつける。ストラップをつけるなら、ここにつける。

以上がフリー・ベースの構造だ。他のベースもだいたい同じようなパーツで構成されている。このフリー・ベースは、いいベースだ。[演奏]

■ Stringing the Bass / ベースに弦を張る

ベースに弦を張る方法を簡単に説明しよう。いずれはしなければならないことだ。弦は切れるし、古くなる。いつかは新しい弦を張らなければならない。僕はベースを始めたころ、弦を張る作業が大好きだった。そう、ビッグなロック・スターになって他の人に弦を張ってもらうようになる前は、自分で新しい弦を張るのが大好きで、とても気分がよかった。弦は古いほうが好きだという人もいる。古くなればなるほど温かみがあって、ずしりと響くサウンドになる。とても美しい音だね。反対に、新しい弦のきびきびした切れのあるサウンドが好きな人もいる。これも個人的な好みの問題だ。僕はどちらも好きで、演奏するものによって使い分ける。

4弦を外してあるから、これを張ってみよう。これが4弦だ。端に小さなつまみがついているほうを下のブリッジのところに入れる。反対端は赤い布のようなものがついていて、これをチューニング・ペグに入れる。

やってみよう。ここの4弦が外されている。ボディの裏を見ると、ここに4弦の穴がある。弦をこの穴に差し込む。ここに通して、表から弦を引っ張りだす。これをネックに沿って引っばる。そして弦の反対端をチューニング・ペグのこの部分に差し込む。こうやって穴に入れる。しっかりと入れたのが感覚でわかる。そして横から出して、時計回りに1回巻きつける。弦が長くて何度も巻きつけなければならないほどだったら、弦の端を切り落とす必要がある。ペンチで切ってもいいし、何度も曲げたり伸ばしたりしていれば自然と折れる。

ともかく、弦を時計回りに 1 回巻きつける。必ず時計回りに巻くこと。そしてペグを反時計回りに回してきつく締めていく。締めながら、弦をナットの正しい位置に当てて、ネックに沿ってまっすぐ引っぱる。適度な緊張になるまで締めていく。もうすぐだ。

弦を張ったら、次はチューニングだ。弦を張ったら自動的にチューニングが合うわけではない。自分でチューニングする必要がある。チューニングにはさまざまな方法がある。簡単なのは、エレクトリック・チューナーを買うことだ。僕が子どものころは持っていなかった。でもチューナーにつながれば、自動的にチューニングしてくれるから、簡楽ではある。あるいは、ピアノや他の楽器に合わせてもいいし、レコードでもいいし、音程が合っているとわかっているものなら何でもそれに合わせてチューニングできる。

今回は、3 弦を基準に 4 弦をチューニングする。これはすでにチューニングが合っている。他の 3 本の弦の A (3 弦)、D (2 弦)、G (1 弦) は、たがいにチューニングが合っている。[演奏] この 3 本は一緒に演奏するとよく調和しているけど、ここに 1 弦を加えると…… [演奏] 1 弦がかなり低いから、これを上げる必要がある。

別の弦に合わせてチューニングする時は、そのすぐ上の弦の 5 フレットの音を鳴らす。[演奏] この音を鳴らして、ハーモニック音を出す。[演奏] そうすると、「ワウワウワウ……」と鳴っているのが聞こえる。[演奏] バランスが取れてこの「ワウワウ」が止まるまで調節する。「ワウワウワウ……」と鳴るのは、周波数が合っていないくて、不協和音になっているからだ。チューニングをして音程を上げていくと、この波がならされて水平になり、不協和音が協和音になる。[演奏] これでチューニングが合った。

今回は、すでにチューニングが合っている他の弦に合わせて 4 弦をチューニングした。でもどんな音程に合わせても、音程が近づいてくると「ワウワウワウ……」と鳴る。そうなれば、波がならされて均等になるまで調節すれば、チューニングを合わせることができる。

チューニングのやり方に慣れるには、ちょっと時間がかかるだろう。最初からすぐにできるものではない。練習して覚える必要がある。チューナーを使うのが楽だけど、正直に言って、僕はチューナーを使わずに自分の耳で確かめてチューニングをする方法をお勧めする。最初は難しいかもしれないし、できるようになるまで少し時間はかかるけど、自分の耳で聴いてチューニングできる

ようになれば、いつでもぱっとベースをチューニングできるし、音楽を聴いて理解する力が高まって、ベース・プレイヤーとしての能力が上がる。だからチューナーを使うのが簡単だけど、あえて使わないことをお勧めする。[演奏]

■ Technique／テクニック

さて、いよいよベースを演奏するための基本のテクニックについて話をしよう。最初に話したいのは僕が一番よく使うテクニックで、ベースを演奏するテクニックとしては最も一般的な、指でピッキングする方法だ。

ピッキングには、この人差し指と中指の2本を交互に使う。2本の指で歩くような動きだ。人差し指でくりかえしピッキングしたり、中指でくりかえしピッキングしたりするのはよくない。もちろんどんなルールにも例外はあるし、ルールは破るためにあるわけだけど、基本は、この2本の指を交互に使うことだ。

[演奏] 歩くようにピッキングする。

弦を引っぱってはいけない。弦の下に指を引っかけて引っぱるのではない。

[演奏] 指で弦をたたく。[演奏] こうやって4弦を2本の指で交互にたたく練習をしばらく続けて、この感覚を身につけよう。[演奏]

この動きに慣れてきたら、3弦に上がる。[演奏] 左手ではフレットを押さえていない。右手の人差し指と中指だけを使って、歩くようなスタイルでピッキングしているだけだ。[演奏]

次に2弦に上がる。[演奏] そして1弦に上がる。[演奏] そして4弦に戻る。

[演奏] これをしばらく練習して感覚をつかむ。ベースも他の楽器と同じで、やればやるほど自分の一部になって、自然になって、自分の体の延長のように感じられる。[演奏]

練習を続けながら、自分でエクササイズを考えるといい。例えば、各弦を2回ずつピッキングする。[演奏] 3回ずつピッキングする。[演奏] 2本の指は常に交互に使うこと。しばらくすればスピードがついてくる。[演奏] 速くやることもできるし、ゆっくりやることもできる。

ピッキングについてもう1つ言っておくと、僕はこうやって2本の指を交互に使うけど、別のやり方をするベース・プレイヤーもいる。特にヘビーロックのベース・プレイヤーだ。ギーザー・バトラーとか、ロバート・トゥルージロとか、すごくヘビーなベースを演奏するプレイヤーは、この2本の指だけでな

く、薬指を使ったり、場合によっては小指も使ったりする。つまり、こんなふうに…… [演奏] ……指を交互に使う代わりに、薬指を加えて、馬が疾走するように指を動かす。[演奏] 僕はあまり使わないけど、このテクニックを身につける価値はある。

まずは 2 本指を交互に使って歩くような動きに慣れることだ。弦を引っぱるのではなく、たたくこと。[演奏] これがベースのピッキング。[演奏] ピッキングについては以上だ。

次にスラッピングについて説明しよう。これはスライ&ザ・ファミリー・ストーンのラリー・グラハムが始めたスタイルだと思う。もしかしたら別の人かもしれないけど、ラリー・グラハムはこのスタイルで有名だ。少なくともこのスタイルでエレクトリック・ベースを演奏したことで知られている。これもいくつかのやり方がある、僕のやり方を実演するけど、大勢の人のスタイルを研究して自分に合ったスタイルを確立してほしい。

基本のテクニックでは、親指で低い弦をたたく。親指の真ん中にある骨のところを使ってたたくこと。親指で 4 弦をたたく。[演奏] こうするんじゃないで……パチッとたたくんだ。こうやって親指を押さえつけるのはよくない。[演奏] それに、かき鳴らしたり、横からたたいたりしないこと。こうやってパチッとたたきつける。すばやくたたくだけだ。[演奏] この動きを練習しよう。[演奏] いろいろ遊んでみたけど、基本的にはこうやってたたくだけだ。慣れてきてお気に入りのリズムが見つかったら、この動きで演奏してみよう。

このテクニックの後半は、引っぱり上げることだ。親指をふりおろしてから…… [演奏] ……別の指で引っぱり上げる。僕は中指を使う。2 弦に移動して、1 弦と 2 弦でオクターブを演奏する。この音と、この音だ。まずは親指でたたいて、次に中指を 2 弦の下に入れて引っぱり上げる。[演奏] こうやって引っぱり上げるんだ。[演奏] この引っぱり上げる動きだけを練習して、しっかり合うやり方を見つけよう。こうやって親指をふりおろし、中指を引っぱり上げる動きを合わせる。[演奏]

練習を続け、ベースやハーモニクスについて知り、音楽理論の理解が深まるにつれて、自分でエクササイズを考えたり、お気に入りのベース・ラインを見つけたりできるようになる。理解が深まると、さまざまなやり方が見つかるだろう。でも僕はこうやってスラッピングのテクニックを覚えた。オクターブを演奏する。[演奏] そしてこんなリズムを演奏する。[演奏] これを何度もく

りかえしているうちに慣れてきて、力がつく。練習を積み重ねるうちに楽にできるようになって、力強くなる。いいミュージシャンになるためには必要なことだ。[演奏] そのうちにどんどん速くできるようになってくる。[演奏] ゆっくりやることもできる。[演奏]

これは僕が今でもやっているエクササイズで、演奏前のウォーミングアップにいつも使っている。まずはこうやってオクターブを演奏する。[演奏] そしてオクターブをネックの上下に移動する。左手でオクターブを演奏する。このやり方は、ベースの勉強を続ければわかるようになる。[演奏] ゆっくりやってみよう。[演奏] 続けて。[演奏] そしてネックを下降する。[演奏] 僕のスラッピング・テクニックは、こうやって身につけた。これは僕のやり方だ。これしか方法がないわけではないけど、自分でエクササイズを考えて、このやり方を身につけた。これがフリーのスタイルを確立するための1つの要素となった。以上がスラッピングだ。[演奏]

次は、ピックを使って演奏するテクニックを説明しよう。実は今日はピックを持ってきていないんだけど、ここに25セントのコインがある。クリス・スクワイアはこのコインを使っているらしい。彼はいいベース・プレイヤーだ。

ピックを使う時も、基本は同じだ。まずはダウン・ストロークがある。[演奏] ピックでもコインでも、こうやって持って使う。下向きに弦をヒットする。ダウン・ストロークだ。[演奏] そしてアップ・ストロークがある。[演奏] それから、ダウン・ストロークとアップ・ストロークを合わせる。[演奏] これがピックで演奏する方法だ。[演奏]

オーケー。次は左手の話だ。ベースを演奏する時は、左手の人差し指、中指、薬指、小指の4本を使って、あちこちのフレットで弦を押さえて音を作る。親指はネックの裏に回したままだ。こんなふうに傾けたり角度をつけたりするのはよくない。姿勢をくずしたほうが楽な時もあるけど、親指は直角のままで維持する必要がある。つまり、ベースが水平になっていたら、親指はフレットと同じ角度、ネックに対して垂直にする。

この4本の指を伸ばして、4つのフレットをカバーする。1、2、3、4。最初は難しいだろう。指を伸ばすのが大変だ。僕の手は特に大きいほうではないけど、練習を続けているうちに指が伸びてやわらかくなる。そのためにはクロマティック・スケールを練習するといい。クロマティック (Chromatic) というのは、半音で進むということだ。人差し指で1フレットを押さえる。[演奏] 中指

で2フレット。[演奏] 薬指で3フレット。[演奏] 小指で4フレット。[演奏]

まずは開放弦を演奏する。つまり、弦をまったく押さえていない状態、開放したままの4弦だ。[演奏] 次に人差し指で1フレットを押さえる。[演奏] 中指で2フレット。[演奏] 薬指で3フレット。[演奏] 小指で4フレット。[演奏] 続いて降りてみよう。小指。[演奏] 薬指。[演奏] 中指。[演奏] 人差し指。[演奏] 合わせるとこうなる。[演奏] 開放、1、2、3、4、3、2、1、開放。[演奏] これをしばらく練習しよう。[演奏] これを練習すれば指が強くなり、正しいポジションで多種多様なベース・ラインを演奏できるようになる。[演奏]

こんどは3弦に上がって、3弦で同じことをする。[演奏] 開放、人差し指、中指、薬指、小指、薬指、中指、人差し指、開放。[演奏] ちょっと速すぎるかな。最初はゆっくりやろう。[演奏] 指が痛くなるかもしれない。指の筋肉がつるかもしれない。ゆっくりやろう。痛くなったらしばらく休んでからまた始めよう。[演奏] 練習を続けているうちに楽にできるようになってくる。ベースの演奏にはたくさんの練習が必要だ。[演奏]

次は2弦に上がってやってみよう。[演奏] 何度かくりかえしたら1弦に上がってやってみよう。[演奏]

練習はじっくりと時間をかけてやることだ。ゆっくりやって、いい音を出すことに集中しよう。耳障りな雑音がまざらないように、豊かで美しいサウンドを出すようにしよう。自分のサウンドに誇りを持つことはとても大切だ。大勢の人が同じベースを演奏しても、それぞれにサウンドは異なる。演奏する人の感覚によっても違うし、たたく強さによっても違うし、性格によっても違うサウンドになる。それぞれの人が独自のサウンドを持っている。ある人はこんなふうに演奏する。[演奏] これも1つのサウンドだ。別の人にはこんなふうに演奏する。[演奏] こうすると、別のサウンドになる。みんな自分なりの感覚とやり方がある。だから自分のサウンドに集中して、豊かなサウンドを出せるようにしよう。そして、クロマティック・スケールを練習して、左手を強くしよう。[演奏] これをぜんぶ合わせてみよう。[演奏]

クロマティック・スケールを練習するのは効果的だ。すべての指を使って力をつけることができる。しばらくしたら、手のポジションを移動してみる。これは第1ポジションと呼ばれている。人差し指が1フレットのところにあるからだ。[演奏] 4フレットに移動すれば、第4ポジションになる。人差し指を4フレットのところに移動して、同じことをくりかえす。[演奏]

わかるかな？ このレッスンでは、第1ポジションで練習する。[演奏]開放、1、2、3、4、3、2、1、開放。[演奏]親指は同じ位置に保つこと。親指はあちこちに動かさずに、同じ位置に固定する。手はこのポジションのままで練習しよう。最初は指を伸ばすのが大変だけど、そのうちに楽にできるようになる。[演奏]

■ The Major Scale／メジャー・スケール

次に、音楽理論について少し話そう。これはベース・テクニクと、僕らが聴いている西洋音楽の基礎でもある。メジャー・スケールの話だ。メジャー・スケールは、1つの音から始まり…… [演奏] ……1オクターブ上の同じ音まで続く。[演奏]ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。[演奏]「ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド」はメジャー・スケールで、西洋音楽の基礎となるものだ。

メジャー・スケールを演奏してみよう。このスケールは、Aキーだ。この音はAで、ルート（根音）とも呼ばれる。AキーでAメジャー・スケールを演奏する場合、最初の音はルートのAだ。中指で4弦のAを弾く。[演奏]そして小指でBを弾く。[演奏]次に人差し指を3弦に移動して…… [演奏]C#を弾く。次は中指で…… [演奏]Dを。小指で…… [演奏]Eを。人差し指を2弦に移動して、F#を。[演奏]薬指で同じ2弦のG#を。[演奏]小指で2弦のAを。[演奏]これは最初のAの1オクターブ上の音だ。つまり、下のほうで弾いたAの8つ上の音と言うことだ。[演奏]

よく見えるように演奏してみよう。[演奏]人差し指、小指、次の弦へ上がって、人差し指、中指、小指、次の2弦へ上がって、人差し指、薬指、小指。[演奏]

ここから下降する。また小指で2弦のAを。[演奏]薬指、人差し指、3弦に下がって、小指、中指、人差し指、4弦に下がって、小指、中指。[演奏]

このパターンに慣れるまで練習するといい。理論を学び、音と音の関係について理解を深めれば、ここでしていることも、もっとよくわかるようになる。これは初めてのレッスンだ。初めてのレッスンにしてはずいぶん高度だけど、練習するうちにわかってくるはずだ。[演奏]

いいかな？ これを演奏する時、手の位置が変わらないことに注目してほしい。親指はネックの裏、人差し指と中指の間くらいにある。親指はこの位置

から動かない。手はこのポジションのままだ。あちこちに動かさずに、この位置に固定してメジャー・スケールを演奏する。[演奏] ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。[演奏]

時間をかけてゆっくりやれば、わかってくる。[演奏] 中指、小指、人差し指、中指、小指、人差し指、薬指、小指。[演奏] 上から始めてまた下降する。[演奏] 小指、薬指、人差し指、小指、中指、人差し指、小指、中指。[演奏]

これはネックのあちこちに移動できる。ネックのどこで演奏しても、フィンガリング（運指）とポジションは同じだ。ここで A キーを演奏するなら、さっき練習したとおりだ。[演奏] これを下のほうに移動して、中指でこの F# を押さえてみよう。[演奏] さっきと同じ動きだ。[演奏] 人差し指、小指、人差し指、中指、小指、人差し指、薬指、小指。[演奏] また下降する。[演奏]

ネックのどこで演奏してもかまわない。手のポジションが同じなら、最初に弾く音がスケールのルートになる。[演奏] ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。[演奏] ずっと上のほうでやってもいい。[演奏] そして最初の A に戻る。[演奏]

メジャー・スケールについて学ぶ時は、音に番号をつけるのもいい。スケールの 8 つの音に番号をつける。最初の音と最後の音は同じだから、実際には 7 つの音しかないけど、こんなふうに数える。[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。8、7、6、5、4、3、2、1。[演奏]

次に、音と音を合わせた時の、2 つの音の関係について考えてみよう。一般によく組み合わせられる音を合わせてみる。A キーでベース・ラインを演奏するなら、この A メジャー・スケールが使える。[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。8、7、6、5、4、3、2、1。[演奏] ここからベース・ラインを作るなら、例えば 1 と 5 を組み合わせる。[演奏] ついでにオクターブの 8 も入れてみた。[演奏] 1、5、8 を使っている。1 と 8 は同じ音だから、実際には 2 音しか使っていない。[演奏] ここに 3 を入れてみよう。1、3、5、3、1…… [演奏] これでベース・ラインを作る。[演奏]

このように音を番号に置き換えると、ネックのどこに移動しても、どのキーで演奏しても、同じ数字を当てはめることができる。このメジャー・スケールで考えてみよう。[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。8、7、6、5、4、3、2、1。[演奏] 1 と 5 の間の距離は…… [演奏] これはどのキーでも変わらない。つまり、この C へ移動して、C メジャー・スケールを演奏しても…… [演奏] 1、2、

3、4、5、6、7、8。8、7、6、5、4、3、2、1。[演奏] このCキーで1と5の2つの音を使うことができる。[演奏] これはAキーで演奏する時も同じだ。1と5の間の距離は、別のキーの1と5の間の距離と変わらない。[演奏]

メジャー・キーのメジャー・スケールを何度もくりかえし練習しよう。[演奏] これを使ってクリエイティブな自分のベース・ラインを作れるようになる。このメジャー・スケールの8つの音でベース・ラインが作れるわけだ。[演奏]

これはつまらないベース・ラインだけど、メジャー・スケールの音を使ってシンプルなものを作ってみた。百万通りものやり方がある。例えばAメジャー・キーでAメジャー・スケールの音だけを使っても、百万通りものベース・ラインを作れるし、百万通りの選択肢があって、可能性は無限に広がる。

例として、Eキーのメジャー・スケールを使ってみよう。4弦から始まる。[演奏] 開放弦を使うからフィンガリングは少し変わるけど、内容は同じだ。[演奏] ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。[演奏] これでレッド・ホット・チリ・ペッパーズの「Under The Bridge」のベース・ラインも演奏できる。このメジャー・スケールの音しか使わない。[演奏]

オーケー。そしてAメジャー。できることは無数にある。このメジャー・スケールだ。[演奏] ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド。[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。[演奏] 1、8、1、8。1、5、1、5。1、3、1、3、1、3、1、3、1……[演奏] 1、2、3、4、5、6、7、8。[演奏]

とにかくメジャー・スケールを学ぶことだ。ちょっとわかりにくい説明だったかもしれないけど、だいたいのところはわかってくれたと思う。フィンガリングは何通りかあるけど、これがやりやすい。[演奏]

ベースについて学ぶには、こうやってネックのあちこちでメジャー・スケールをくりかえし練習するといい。[演奏] このように続く。[演奏]

■ The Bass／ベースというもの

ベース・ギターは、だいたいのバンドで一番低音の楽器で、バンドのサウンドを底から支えている。温かみのあるサウンドで、みんなが眠るためのベッドとなる。ベースがサポートするのは、注目を集めることが多い高音のメロディックな楽器だ。ベースが他の楽器を力強く支えれば支えるほど、他の演奏者を輝かせることができる。

僕が強調したいのは、ベース・プレイヤーとして大切なのは「与える精神」だということだ。これはどんなミュージシャンにとっても大事なことだけど、ベース・プレイヤーにとっては特に重要だと思う。ベースは、ボーカルやソロイスト、メロディックな楽器をサポートすることが多い。すべての高音の楽器を支える。だからベース・プレイヤーの仕事は、楽しく演奏し、練習と音楽を勉強することによって培った確かなタイム感としっかりしたリズム感を持つことに加えて、ソロイストを聴くこと、前面に出ているメロディックな楽器が何をしているかを聴くことだ。

だから自分だけの世界に集中して、シンプルなパートであれ、複雑なパートであれ、自分のパートをくりかえし演奏するのではなく、他の楽器が何を演奏しているかを聴きながら自分のパートを演奏し、そして高音の楽器の演奏を引き立てるような、さりげないニュアンスのある演奏をすることができれば、とても優れたベース・プレイヤーになることができる。

もう 1 つ言いたいことがある。ベースを演奏する場合、リズム・セクションの 1 人として演奏することが多い。ドラマーと一緒にリズム・セクションとして演奏するということだ。そしてドラマーの演奏をよく聴くことは、ベース・プレイヤーとして最も重要なことだ。

ドラマーがバスドラムをヒットする時、そのバスドラムをヒットする音の真ん中でベース・ノートヒットしたい。僕はずっとそれを目指してきた。ドラム・ヒットの真ん中でベース・ノートヒットするということだ。ドラムセットのスネアドラムが「ポン！」という時、その「ポ」と「ン」の間でベースをヒットすることが理想で、僕はいつもそれを目指している。

ベース・プレイヤーとして、他の人の演奏を引き立てたい。ドラマーのサウンドを、そのドラマーが世界一のドラマーに聞こえるようにしたい。バンドのみんなを輝かせたい。バスケットボール・チームのポイント・ガードのようなものだ。優れたポイント・ガードは他の選手を引き立てるものだけど、ベース・プレイヤーはバンドのポイント・ガードのようなものだと思う。

これは従来の構成のロック・バンドの話だけど、どんな構成のバンドでも、ベース・プレイヤーがその基礎を築いている。みんなが寝るためのベッド、みんなが踊るためのフロアを作っている。しっかりした基礎を築くためには、リズム感がよくなければならないし、他のみんなが何をしているかをよく注意して聴かなければならない。そしてみんなが美しく映えるような雰囲気を作るた

めに、できるだけ努力する。それが音楽におけるベースの役割だと思う。

もちろん例外はあるし、僕自身も目立ちたがり屋だから、前面に出てソロをとることもよくある。でも自分の役割は自覚しているし、僕が尊敬するベース・プレイヤーたちもみんなその役割を果たしている。モータウンのヒット曲の大部分を演奏しているジェイムズ（ジェイミー）・ジェマーソンのような偉大なベース・プレイヤーもそうだし、ベース・ギターを革新した偉大なソロイストのジャコ・パストリアスもそうだ。彼らはふつうのベース・ラインを演奏する時も、さりげないニュアンスのある演奏をしている。彼らのさりげない演奏がすばらしいのは、自分が目立とうとしているのではなく、まわりで起こっていることに反応しているからだ。優れたミュージシャンになるためには、他の人の演奏を聴くことが最も重要なことだ。ベース・プレイヤーにとっては特に重大なことだと思う。

経験を積みれば積むほど、考えずにできることが増えてくる。音楽を自分の中に取り込んで、意識せずに反応できるようになる。「ウイドルウィアアップ」と聞こえたら、自分も「ウイドルウィアアップ」と演奏するということだ。大事なのは、よく注意して聴くことだ。やがて音楽と1つになって、音楽を自分のものにして、呼吸するように演奏できるようになる。それが理想だ。

ベース・プレイヤーとしての僕の最後のアドバイスは、自分らしさを貫き、自分がしていることに夢中になることだ。こんな音楽がいいとか、これがクールだとか、他の人に言われても気にせずに、自分らしさを守ることだ。どのベース・プレイヤーも、自分だけのユニークなベース・ラインを持っている。自分の個性を見つけてそれをベース・プレイヤーとして表現するために練習し、勉強することだ。以上がベース・ギターについての僕のアドバイスだ。[演奏]

©2010 Yamaha Music Trading Corporation

※この対訳書を無断で複製、頒布、引用（内容の一部、全部を問わず）する事は法律で禁止されています。